

序章

生物多様性ふなばし戦略の改定について

(1) 戦略改定の趣旨

地球上に多様な生き物がいて複雑で多様な生態系をつくりあげていることで、私たちは自然の恵みを受けながら生きていくことができます。そのため、生物多様性を保つことはとても重要です。

船橋市では、生物多様性の保全と持続可能な利用を図るため、2017年（平成29年）3月に「生物多様性ふなばし戦略」を策定し、各種施策を進め、本年で5年が経過しました。この間、2010年（平成22年）生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）で設定された愛知目標は、2020年（令和2年）に目標年度を迎えましたが、完全に達成できた個別目標はありませんでした。国内外において、今まで通りの暮らし方や社会・経済活動のあり方では生物多様性の回復は実現がむずかしく、社会・経済活動による影響への働きかけも含めた総合的な対策により、社会変革を起こすことが必要であると考えられます。

2015年（平成27年）に国連で採択された持続可能な開発目標（SDGs）は、環境・社会・経済の三側面を統合した取組で、持続可能な社会の実現をめざす世界共通の目標であり、現在、様々な主体がその達成につな

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



SDGs 17の目標（出典：国際連合広報センター Webサイト）

がる取組を行っています。生物多様性の保全もまた、SDGsを達成し、持続可能な社会を実現することに密接不可分であるといえます。

現在も終息していない、新型コロナウイルス感染症の拡大においては、世界中で経済が大きく停滞し、日常でも行動が制限されることとなりました。しかし、一方でコロナ禍をきっかけに屋内での密集を避け、野外で自然にふれあう機会が増えるなど、自然へ

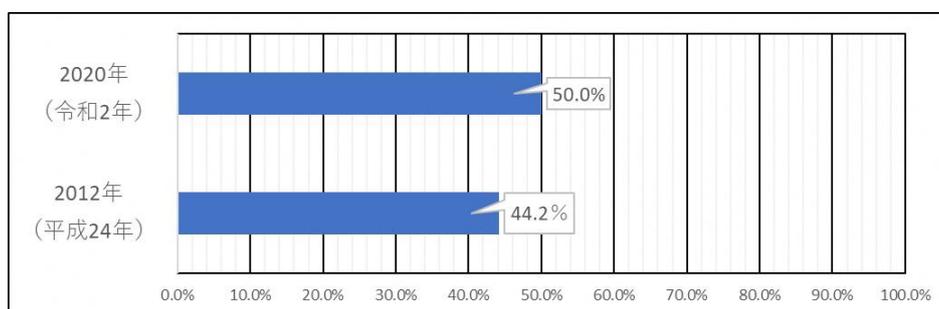
の関心が高まっている傾向がみられます。これからの時代は人だけでなく動物、生態系の健康も考えたワンヘルス（次ページコラム参照）の考え方も重要です。

船橋市内において、海老川流域における経年的な調査で確認される種数は、重要種・外来種含め変化はみられませんでした。2013年（平成25年）、2014年（平成26年）の市域の自然環境調査では見つからなかった、特定外来生物のカミツキガメやヒアリらが近年確認されています。今後は、市域の自然環境の状態を把握し生物多様性の保全に関する取組を効果的に進めていくことが必要と考えられます。

また、戦略策定時と比較して、市民の生物多様性の認知度、自然環境に配慮した行動や事業者の事業活動と生物多様性の関係については、意識の向上がみられています。しかしながら、生物多様性の保全に向けた取組をさらに進めていくためには、普及啓発と向上した意識を効果的に活かすための仕組みづくりについても、検討が必要と考えられます。



自然環境調査の様子



「生物多様性」という用語の認知度（市政モニターアンケート）

船橋市では、SDGsの考え方を取り入れ、環境・社会・経済の課題の同時解決を視野にいたした「第3次船橋市環境基本計画」を令和2年度末に策定しており、ここでは、生物多様性を保全し、利用していく考え方や台地から浅海域せんかいいきまでの水循環の健全化を通して、自然の働きを豊かなくらしに活かしていく施策を取り入れています。このように、上位計画である「船橋市環境基本計画」についても新計画が策定されたことから、令和8年度の短期目標年度、令和32年度の長期目標年度を見据えて、戦略の中間年度である令和3年度に「生物多様性ふなばし戦略」を改定することとしました。

今回の改定では、生物多様性に関する施策とSDGsの目標との関連を示しながら、生物多様性の保全と持続可能な利用を進めることで、様々なまちづくりの取組の付加価値を高めながら安全で豊かなくらしにつなげるとともに、市民や事業者による新たな取組が本市からはじまり広がっていくことをめざしています。

コラム

ワンヘルス (One Health)

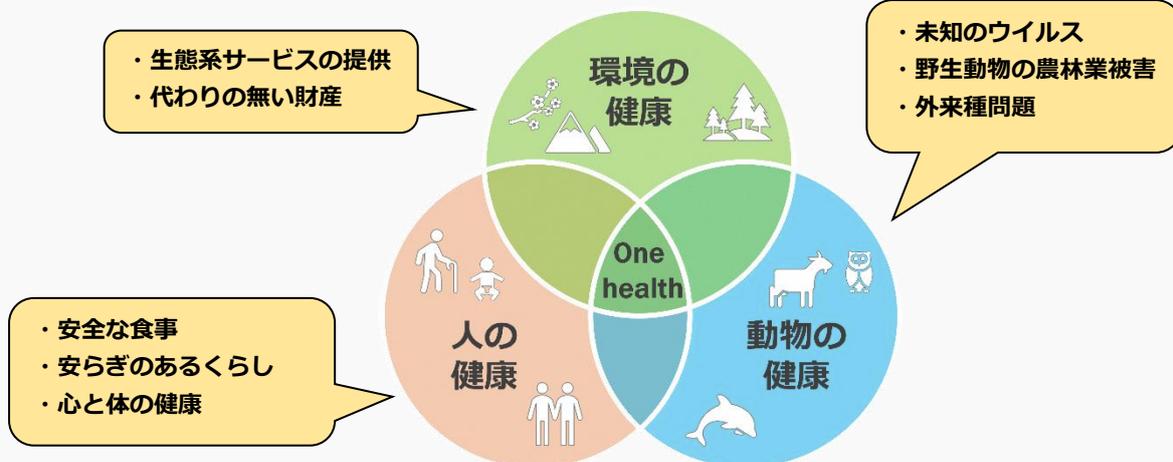
新型コロナウイルスから学ぶべきこと

地球は我々にとってたった一つのHomeであると同時に、他の多くの生き物にとってもかけがえのない居場所です。地球上のすべての命が相互に複雑に絡み合い、支え合うことで、地球の健康が保たれています。ワンヘルスとは、人・動物・環境の健康を一つのものとしてみなし、どれも欠かすことのできない存在であるという考え方です。

2019年（令和元年）に発見され、世界中で流行している新型コロナウイルスは、国連の報告書⁰⁻¹⁾によると野生動物由来のウイルスである可能性が指摘されており、人と野生動物との不適切な接触が引き起こした感染症である可能性があります。さらに、近年も発生がみられた高病原性鳥インフルエンザも、食料の大量生産のために過度な数と密度で飼育された養鶏と野鳥の接触が引き起こした、まさに地球の健康バランスが崩れたことによる感染症と考えられています。

今回のパンデミックから私たちが学んだことは何でしょうか。それは、かつての日本ではごくあたりまえだった、「自然と共に生き、必要な分だけその恵みをいただく」という生き方にヒントがあるのではないのでしょうか。

One Health 地球の健康はみんなの健康



「船橋にんじん」で、人も土も生き物もみんな健康に!!

千葉県では「持続性の高い農業生産方式の導入の促進に関する法律」⁰⁻²⁾に基づいて、環境に配慮した土づくりや農薬などの使用低減に取り組み、県知事の認定を受けた生産者をエコファーマーに認定しています（2020年度（令和2年度）現在、970名が認定済み）。船橋市は千葉県内でも有数の春夏ニンジンの産地であり、「船橋にんじん」は2013年（平成25年）



に特許庁から地域団体商標(地域ブランド)の認可を受けました。さらに、カロテンが豊富な船橋にんじんの「ベーターキャロット」⁰⁻³⁾を生産する農家4名全員がエコファーマー認定を受け、環境にやさしい農法でにんじんを栽培しています。

(2) 戦略改定の指針

(1) 戦略改定の趣旨をかんがみ、以下の指針のとおり、生物多様性ふなばし戦略を改定します。

1) 対象とする期間

2022年度（令和4年度）～2026年度（令和8年度）（5年間）

2) 方針

①課題への対応

●船橋らしさ

台地から浅海域までの変化に富む地形、そこに育まれた多様な生物、産業、文化といった船橋らしさを活かした施策を検討します。

●社会的課題

高齢化による後継者不足など、複数の施策の遅れの要因となっている社会的課題などについて、上位計画である第3次船橋市環境基本計画などと整合のとれた施策を検討します。

②最新動向の反映

地球規模生物多様性概況第5版（GB05）、生物多様性及び生態系サービスの総合評価（JB03）や次期国家戦略の検討内容をふまえ、上位計画である第3次船橋市環境基本計画などとの整合を図り、施策を見直します。また、持続可能な社会の実現に向けて、生物多様性の保全に関する取組と、SDGsとの関連をわかりやすく示します。具体的には、市の他部署や近隣自治体、県、国、事業者、市民との連携強化、グリーンインフラの活用、気候変動をふまえた自然環境の変化を把握する施策などを検討します。

③実効性の強化

●多様な主体の取組の推進

本戦略の実効性をさらに強化するため、市民・事業者・大学などの専門機関からの参画を推進します。戦略管理指標においては、施策の効果の客観的な評価が可能であり、かつ各取組の担当課が施策の進捗を容易に管理できる指標を設定します。

●わかりやすさ

市民及び事業者に期待する取組を再整理し、それぞれの取組が生物多様性の保全のために果たす役割についてわかりやすく解説し、行動のきっかけとなるように示します。

（p93 参照）